

日本語学習者の語り文における習得階層

—表現形式に注目して—

横浜国立大学大学院生 代弟

1. はじめに

日常生活の中で、外国人、いわゆる日本語学習者の発話を聞くと表現の仕方が何となく違和感を与えることが感じる。筆者自分自身も発話した後に良く振り替えてみると日本人母語者と違う表現していることがよくある。例えば：以下の例からわかると思う。

A さん：昨日隣の部屋の赤ちゃんに泣かれて、寝られなかった。(母語話者)

B さん：昨日隣の部屋の赤ちゃんが泣いて、寝られなかった。(学習者)

C さん：箱を開けたら、犬が出てきました。(母語話者)

D さん：箱を開けて、.... 急に犬が出てきました。(学習者)

このように日本語学習者の語り文に日本語学習者の語り文と違うところが良く見られる。日本語学習者の語り文は意味として伝わるが、日本語母語話者のように適切な表現の使用ができていない印象を与える。

そこで、本研究では、日本語母語話者の語りと日本語学習者の語り文の接続表現と評価表現の使用の違い明らかにしたうえで、日本語学習者の語り文の表現形式の習得階層を明らかにしたい。

本研究を似て、日本語学習者の語り文における構造と表現形式の習得階層を明確にして、今後の教育で日本語学習者が意識していないことを教師の方から意識させることで、教授に役に立つと考えられる。さらに、習得階層を持ち、易しいものから教えると効果があるのではないと考えられる。

2. 先行研究

語り（ナラティブ）とは「体験談を含めた話で、一連の出来事を時間の流れに沿って、より遠い過去の出来事から現在により近い過去の出来事へと語る行為」と定義されている（南 2018）。語りにおける論理展開のまとまり、すなわち「一貫性」と、節や文の相互関係、話の連鎖的構造における場面同士の「結束性」は、語り手・書き手が聞き手・読み手に話の内容を適切かつ効果的に明示するために重要な役割を果たしている（南 2018）。

小口（2018）、砂川（2017）は日本語母語話者と学習者の評価表現また順接接続詞の違い

を明らかにした。

これらの研究では日本語母語話者と学習者の語り文における評価表現また接続表現の違いを明らかにしたが、学習者の習得階層をまだ明らかにしていない。以上を踏まえて、本研究で学習者と日本語母語話者の語り文の評価表現と接続表現の違いを明らかにして、学習者の語り文の評価表現と接続表現の習得階層を明確にすることを目的にする。

3. 調査方法

3.1 対象と手順

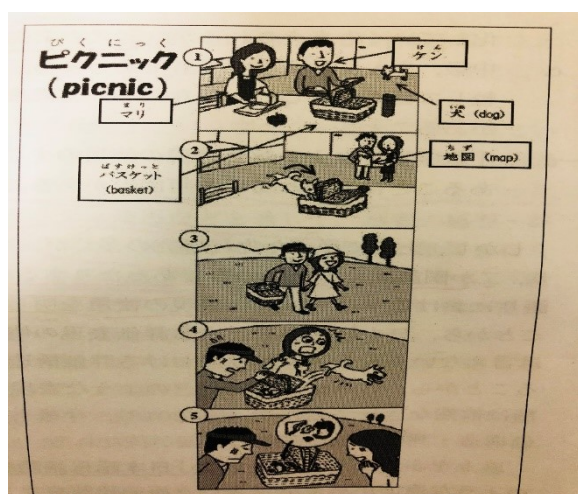


図1「ピクニック」のイラスト（迫田他 2016）
を作りまして」と書いてある5コマの漫画を見せて、2-3分の考える時間を与えた。次に、協力者が漫画を見ながら筆者に漫画の内容を伝える。それを録音した。最後に、録音した音声文字化して分析した。

中国語とモンゴル語を母語とする日本語学習者30名（SPOTを実施して初・中・上級各10名に分けた）と日本語母語話者5名を対象に5コマ漫画を見せて、それぞれ日本語で話してもらい、録音した。

まず、協力者に「この漫画を見ながら、漫画を見ていない人に漫画の内容を伝えてください」という課題を与えた。下にタイトル「ピクニック」と第一段「朝、ケンとマリサンドイッチ

3.2 分析方法

表1 日本語母語話者の語り文の分析例

朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました。	
サンドイッチを作っている様子を遠くから犬が見ていました。	
そして、二人はピクニックに行くために地図へ場所を、確認をしていました。	
二人は地図を見ている時に犬がサンドイッチを入れたバスケットの中に潜り込んでしまいました。	場面1
二人はそれに気付かず、ケンがバスケットを持って二人でピクニックに行きました。	
そして、二人が昼ご飯を食べようと思った時に、思っ、バスケットを開けたときに何と犬がそこから出てきて、ケンとマリはとてもびっくりしました。	場面2

そして、バスケットの中を見て見ると二人が作ったサンドイッチは犬に食べられており、食べられてしまっていました。

場面 3

録音したデータを文字化して、表 1 のような三つの場面を設定して、評価表現と接続表現を抽出して、日本語母語話者と学習者のデータをそれぞれに分析した。

4. 結果と考察

表 2 日本語母語話者の語りの使用表現（接続表現／評価表現）

	場面1	場面2	場面3
J1	～時に／ ～てしまいました	～ようと思った時／ ～た	Vると（見ると）／ ～られてしまっていました
J2	～時に／ ～てしまいました	～ようとしたら／ ～た	Vると（確認すると）／ ～られてしまいました
J3	～ところ／ ～ていました	～たら／ ～た	Vると（見ると）／ ～られちゃっていました
J4	～うちに／ ～てしまいました	～すると／ ～た	Vると（見ると）／ ～られてしまいました
J5	～間に／ ～てしまいました	（なし） ～Vし+驚きました	Vると（見ると）／ ～られていて．．．

日本語母語話者の語りに関して、A. 評価表現の観点から場面 1 では J3 以外に全員が「～てしまいました」を用い、場面 3 では全員が「～られてしまいました／しまっていました」を用いている。母語話者が「てしまう」「受身」を用い、話者の気持ち・感情を表していることがわかる。B. 接続表現に関して、場面 2、場面 3 ではほぼ全員が「ようとしたら」「たら」「すると」などの接続表現を用い、話者の意外性や大きな出来事が起る前兆を表している。

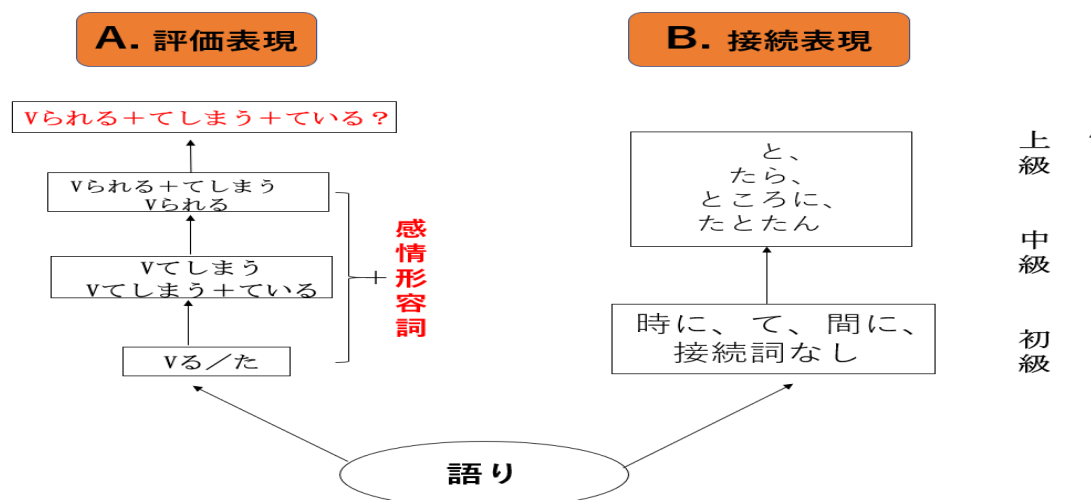


図 2 日本語学習者の語りにおける評価表現と接続表現の習得階層

日本語学習者の語りに関して、A. 学習者の評価表現の習得階層は、レベルが上がるにつれて「Vる／た」から「Vてしまう／てしまっている」また「Vられてしまう／られる」を使えるようになるが、これらの表現を用いた上で半分以上の学習者が「+感情形容詞」を用い、「+感情形容詞」が上級までに続いていることが分かった。ここから学習者のレベルに関わらず「Vてしまう」のような表現はすでに話者の意図や気持ちいわゆる評価が含まれていることを意識していないことがわかった。最後に「Vられる+てしまう+ていいる」を使えるようになることが予測される。B. 接続表現の観点から学習者が初級の段階に接続詞の使用が少ない、80%の学習者が使用しても「時に、て、間に」を使用している。これらの接続詞を用いて、出来事を並列している印象を受け、出来事の意外性や話者の気持ちを表すと言い難いである。中級段階から上級に入ると、60%以上の学習者が「と、たら、ところに、たとたん」という表現を用いて、出来事の意外性、前兆を表すことがわかった。

5. まとめ

日本語学習者と母語話者の語り文の表現形式の違いを明らかにした。更に、習得階層を明確にして、学習者のレベルによって習得される項目があるがレベルが上がっても認識していない項目もある事がわかった。今後の教育で日本語学習者が意識していないことを教師の方から意識させることで、教授に役に立つと考えられる。さらに、習得階層を持ち、易しいものから教えると効果があるのではないと考えられる。

参考文献

- 奥野由紀子（2017）. 日本語学習者に共通して見られる現象と母語による違い—I-JAS に
おけるストーリー描写課題の分析より— 日本語教育連絡会議論文集, 30, 67-75.
- 小口悠紀子（2018）. 日本語学習者の物語発話に現れる評価表現 第四回学習者コーパ
ス・ワークショップ&シンポジウム第二言語習得における語彙の役割予稿集, 20-29.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）. 多言語母語の日本
語学習者横断コーパス 国語研プロジェクトレビュー, 112, 1-31.
- 砂川由里子（2017）. ストーリーテリングにおける順接表現の談話展開機能 庵功雄・石
黒圭・丸山岳彦（編）時間の流れと文章の組み立て ひつじ書房 pp. 183-215.
- 南雅彦（2018）. 日本語学習者の「語り」から見てくる習熟度—語彙・時制・視点 第四
回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム第二言語習得における語彙の役
割予稿集, 10-19.